JAP4110 – Classical Japanese 1
Fall semester 2008
December 8
4 hours

Dictionaries and other reference books may **not** be used.

1.Translate the marked passages from the following texts:

Text A: Taketori Monogatari
Text B: Ise Monogatari
Text C: Hôjôki

2. Analyze grammatically the passages in the texts marked by lines.

Text A

竹取物語

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだててよごとに、黄金ある竹を見つくる事かさなりぬ。かくて翁、やう〳〵ゆたかになり行。

この児、やしなふ程に、すく〳〵と大きになりまさる。三月ばかりになるほどに、よき程なる人に成ぬれば、髪上げなど左右して、髪上げさせ、裳着す。帳のうちよりもいださず、いつきやしなふ。

この児のかたち、けうらなる事、世になく、屋のうちは、くらき所なく、光みちたり。翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ。腹立たしきこともなぐさみけり。

翁、竹を取る事久しくなりぬ。いきおひ猛の者に成にけり。この子、いと大きに成ぬれば、名を、御室戸斎部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。おとこはうけきらはず呼びつどへて、いとかしこく遊ぶ。

世界のおのこ、貴なるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を、得てしかな、見てしかなと、をとに聞きめでてまとふ。そのあたりの垣にも、家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじき物を、夜るはやすき寝も寝ず、闇の夜に出て、穴をくじり、かひ間見、まとひあへり。さる時よりなむ、「よばひ」とは言ひける。

Text B(1)

（二段）

むかし、おとこ有けり。三ならの京は離れ、四この京は人の家まださだまらざりける時に、五西の京に女ありけり。その女、世人にはまされりけり。その人、六かたちよりは心なんまさりたりける。七ひとりのみもあらざりけらし、八それをかのまめ男、九うち物語らひて、帰り来て、一〇いかゞ思ひけん、時は三月のついたち、一一雨そをふるに遣りける。

（三段）

むかし、おとこありけり。一二懸想じける女のもとに、一三ひじきもといふ物をやるとて、

思ひあらば葎の宿に寝もしなんひじきものには袖をしつゝも

一四二条の后のまだ帝にも仕うまつりたまはで、たゞ人にておはしましける時のこと也。

Text B(2)

（四段）

むかし、東の五条に大后の宮おはしましける、西の対に住む人有けり。それを本意にはあらで心ざし深かりける人、行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、猶愛しと思ひつゝなんありける。又の年の正月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひて行きて、立ちてみ、ゐてみ見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思いでてよめる。

5 月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほの〴〵と明くるに、泣く〳〵帰りにけり。

（五段）

むかし、おとこ有けり。東の五条わたりにいと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、童べの踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。人しげくもあらねど、たびかさなりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜ごとに人をすへてまもらせければ、いけどもえ逢はで帰りけり。さてよめる。

6 人知れぬわが通ひ路の関守はよひ〳〵ごとにうちも寝ななん

とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじゆるしてけり。

Text C

三四町を吹きまくる間に、こもれる家ども、大きなるも小さきも、一つとして破れざるはなし。さながら平に倒れたるもあり、桁・柱ばかり残れるもあり。門を吹きはなちて四五町がほかに置き、また、垣を吹きはらひて隣と一つになせり。いはむや、家のうちの資財、数を盡して空にあり、檜皮・葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に乱(る)るが如し。塵を煙の如く吹(き)立てたれば、すべて目も見えず、おびたゝしく鳴りどよむほどに、もの言ふ聲も聞えず。かの地獄の業の風なりとも、かばかりにこそはとぞおぼゆる。家の損亡せるのみにあらず、これを取り繕ふ間に、身を損ひ、かたはづける人、数も知らず。この風、未の方に移りゆきて、多くの人の歎きなせり。

辻風は常に吹くものなれど、かゝる事やある、たゞ事にあらず、さるべきもののさとしか、などぞ疑ひ侍りし。

また、治承四年水無月の比、にはかに都遷り侍(り)き。いと思ひの外なりし事なり。おほかた、この京のはじめを聞ける事は、嵯峨の天皇の御時、都と定まりにけるより後、すでに四百余歳を經たり。ことなるゆゑなくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人安からず憂へあへる、実にことわりにも過ぎたり。